

5C⑭キングダムセミナー20260214

対面で、そしてラインで、録音で、我々の出会いを喜びます。そして喜びを現していきましょう。

賛美:

8 番 全地よ、神に向かい喜び叫べ

12 番 主の祝された命のことは

7 番 今、目覚めるものよ

3 番 おー主 わが主

前半:14:46.86

ラインの皆さんも、こんにちは。

さあ、今日もセミナーを一緒にやっていきましょう。

1ヶ月経って、前回話した内容を覚えておられますか?・・・まあ、少しずつ思い出しながらやっていきましょうね。今日も実は私、前回みたいにプリントを作ろうと思っていたんですけど、作ってません。作ろうと思ったらね、前回みたいに1枚きりじゃあ済まないような気がして・・・これは大変だなと思ってね。それにそこまでやると、完全に講議的になっていきますから、それで、今日は、しっかり話そうというふうに決めました。(なので、プリントはありません。)それで、前回渡した1枚のプリントを、出来ればちらっと見れるところに置いて、見ながらやってもらったらいいと思うんですけど・・・。16:49.26

前は、【**神の国とは何ですか**】という主題でした。で、【**時は満ちた神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい**】というマルコの**1章15節**の単純な一文、イエス様の第一声を取り上げて、それを細かな要素を紹介したんですけど、ここでちょっと振り返りますね。(今、この部屋にいる方々には、コピーが残っていますので、配りますね。)

Mar 1:15

καὶ λέγων ὅτι Πεπλήρωται ὁ καιρὸς καὶ ἤγγικεν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ
 ペプレロータイ満ちた カイロス時が カイそして ヘンギケン近づいた パッシレイア国が トゥーセウー神の
 μετανοεῖτε καὶ πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ.
 メタノイテ悔い改めて カイそして ピステューテ信じなさい エントー中で ユーアングリオー福音を

皆さんにとって、この聖句は、一見、もう聞き慣れた何回も読んで聞いてきた言葉ですよ。【**時は満ちた。神の国は近づいた。**】・・・だけど、これをギリシャ語の原文から滲み出てくるいろんな要素があるんです。『**満ちた**』とか『**時が**』と書いてあるけれど、私たちが今の現代社会の中で単純に読んで、「はい、はい」というものとは、ちょっと奥が違うということを知ってもらいたくて、書いてます。

はい、で、この調子でイエス様がまた来る『再臨』の話も聖書にいっぱいあるので、それをあっちこち取り上げて書こうかなと思ったんですけど、これは、分量が全然違ってとても多すぎるので諦めました。ごめんなさい。

【満ちた】というのは『成就した』『実現したんだ』『完了したんだ』というような思いの言葉です。

5C⑭キングダムセミナー20260214

次、**『時が満ちた』**と言うけど、我々の言う**『時』**というのはね、…一般的にはカレンダーや時計でいう**『時』**ですけど、…**聖書ではその『時』だけじゃなくて、神様があなたに向かってあなたと関わって介入し、神様との関係の中で過ごす『特別な時』というのがあります。それを『カイロス』と言っています。**そして、ここは**“その時《カイロス》“なんですよ**ということです。長い、長い何千年かの歴史年表があって、それで今日という続きの時ですよではなくて、**『今、特別な時だよ』**という、そういう迫りがあるわけです。

そして 2 段目、**『近づいた』**という言葉も。「**“近づく”**って何ですか?まだ来てないってことでしょ」と。そういうふうに思ってしまうけれども、**『近づく』**というのは、もうすぐ来るが、まだ来ていないではなくて、**『すでに来ている。』『あなたの前に来ているから、今あなたの応答を待ってるよ』**という**そういう動的な動きのある言葉だ**ということです。静かな動いてない言葉じゃなくて、パーと、私とあなたのところにやってきたんだという切迫表現なんです。22:04.08

そして次、**《パッシュレイア トゥ セウー》『神の国』**がというものもここに書いてある通り、あその国とか、あその場所とか、あその土地とかという**“領土的な場所”や“国土”**ではありません。そうではなくて、なくて、**『王権』**また、**『治めている』**という**動的な状態を指している**わけです。**『神と人』と『人と人』との王権による関係性をいうわけ**です。だから、私とあなたのところにやってきたんだという**ものすごくダイナミックな動き**なわけなんです。**ルカの 17 章に『神の国は、あなた方のただ中にあるんだ。』**と言った通りです。**神の国はあなたの『ただ中』**にあるし、あなたとあなたの横にいる人、**『人と人との間の関係性にある』**んだよということです。

23:18.24

なぜならば、神様ご自身が**『我々』**と自分を呼ばれた時がある。それは**『父と子と聖霊の関係性』**があるからでしょ。その**関係性がある神様ご自身に似せて**、「あなたを造ろう」と言ったわけですから、神様の**『関係性に似せて』**アダムを造ったんです。だから、**『アダムがひとりであるのは良くない。』**と言われるわけよ。それが、神様の気持ち・思いで、過ごし治めている場所だから。**その神の『関係性の姿』を『神の国』**と言っているわけです。これ、ものすごく抑えておかなければならないことなんです。 24:26.34

それから、一番下の段の**『悔い改めて』**ということは、何かものすごく胸を打ち叩いて涙流して、「ああ、悪うございました」というのが、大抵の人の**『悔い改めて』**という言葉に伴い出てくるイメージになっちゃっていますよね。そうじゃなくて、**今まで違う方を向いていました。それを私の前にやってきたこの“神との関係性”に『向きを変える』、****“主との間の関係性”に向きをかえ『考えを変える』**ということです。

「すでに戸口に来ているから向き合いなさい」というのは、その向き合いの感動とか感覚というのは、人それぞれですよ。本当に文字通り胸叩いて涙流してもう床に這いつくばって、向きを変える人もいれば、なんともない様子で椅子に座って、ふっと向きを変える人もいるわけですよ。そのように人それぞれなんです。みんな真似しなくていいんですよ。要は、本当に心の内側で主に向いたら、それは主が分かってくれるわけですから、人に見せるためじゃないからね。26:04.32

5C⑭キングダムセミナー20260214

で、他にヘブライ語で『シュープ』と言うんですけど、『返る』『立ち還る』という風な意味で使われるんですけど、でも意味はもっと深くて、『離れ去る』とか『退く』という風にも使われるんです。「全然逆じゃん」と思うでしょ。でもね、これがヘブライ語の幅の広さなんです。「なんてこった」と思って「立ち還る」と言っておきながら、もう一方の意味は、「離れ去る」って、「これ、なんだよ」と思うけど、これ使い道によるわけ。

『立ち還った』というのは、今までいたところから『離れ去る』という意味です。逆の意味です。今まで向いてたところから『退く』ということね。

だから、ほら、向きを変えたはいいけれど、今までいたところを チラチラ見てるとか、・・・あるよね。あるでしょ。これですよ。だけど、『向きを還る』ということは今まで見たところは見ない。そこから『退く』んだということなんです。

我々人間の心は気持ちはね、どうもある時、「神様ー！」と言うけど、そこから離れて、飯でも食ってお茶でも飲んでテレビつけて、ほーっとしていると、いつの間にか昔のところにいるわけです。それを「還る」と言ってないからね。その状態をこの後でまた、触れていくと思いますけれど、そういうことです。28:08.46

その次、『信じる』ということ、これも問題なんです。心の戸を開き合って、心と心を交え、“応答し合って生きる”ということ。そして、“互いの中に飛び込んで生きる”ということ。これがね、聖書の初めから言う『信じる』ということの内容なんですよ。

一般の現代人の『信じる』ということ、違うと思いませんか？違うんですよ。なんかね。「はい。ええ、私、あれ信じますよ」と言って、ちょん、ちょん、ちょんと、そこに行ってカンカンと鳴らしてパンパンと手を叩いて、「はい、信じました」と言う。そういうその相手が十字架になっただけ。イエス様になっただけ。「ええ？これが信じるということなの？」という感じ。29:22.08

神様は、『女の末を生み出すため』に受け皿となる民族を造ったんです。それは、メシアをこの地上に受け取るために、準備した民族なんです。その民族を教えないといけないでしょう。だから、『信じる』ということは、こういうことなんだよということを、もう微に入り細に入り、生活の朝から晩まであだこうだと、神様は教えたんですよ。それが旧約聖書の中にいっぱいあるわけよ。うん。30:12.96

だから、彼らが『信じる』と言ったら、大変なんです。口先だけの問題じゃないわけ。もう日常の行いのすべてにわたって、それがビシッと整えられていってないと、「あんたは信じてない」ということになるというね、そういう厳しい世界だったんでしょ。パウロはそんな中で生まれ、そんな中で育って学んで、ガマリエルという厳しい人の元で育てられました。だからあのナザレのイエスという男は、なんか先祖からの言い伝えを適当にやっていると。もうとんでもないやつだと、だから、そういう輩が増えてきたんだと言って迫害したわけでしょ。

5C⑭キングダムセミナー20260214

パウロ(サウロ)のその頃の「信じる」と言ったら、律法的な「信じる」だったわけよ。ところが『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。わたしはあなたが迫害しているイエスである』と言われたイエス様と、真っ向からの出会いをして、彼はひっくり返っちゃったんですね。

だから、我々が「信じる」と言って、ピシピシ生活の中でやっていたこの『信じる』という思いは、このイエスの生き方の中にあっただということに目が開かれて、パウロは変わっていくわけよ。

単なる昔の古文書や教え、法律全書みたいな感じで、それに神の言いたいことがここにあるんだと言って、ピシピシ、ピシピシやっていると、神自身の心はそこだけじゃないんだと。イエス様と出会って本当に、心と心の出会いの中にあっただということをごこのセミナーでは、いっているわけです。

第5クールでは、もう言いまくっています。『わたしとあなた』というその『真実な関係性』が、神が求めていることだよということです。『私とそれ』じゃないんですよ。32:58.98

だから、昔のパウロは、ともすれば、神様の"ことば"と言いながら、神様の"ことば"を『私とそれ』にしたのかもしれない。でもそうじゃないんだと。「神の"ことば"は、あなたが口から吐かれる『息の言葉』なんです。」と。神に対する"信じる"ということも、そのことをもう全身で知ったわけよ。だから、心の戸を開き合って、私たちは出会う。『おー主、我が主。親しい主よ』と言って、今歌いましたよね。こうして、私の心と主の心を交えるんです。どっかに私という人間を置いて、自分は横っちょで私を見てね、「あ、私ってこんな人ね」って・・・「ああ、こんなところがあるわ」と言って、自分を眺めて、そしてちらっと神様の方を見てね。ああ、神様ってこんな私みたいな人間呆れてるよね。」と言って眺めるのとは違うんですよ。34:36.54

これは、『我と汝』じゃあないんです。これ、私は『それ』と見ているんです。で、神様をチラッと見て「ああ、神様は私を見て呆れておられるわ。駄目だわ。こんな私。」と思って眺めること、それは、主の前に立つことじゃないんです。35:01.19

私は私として、真実な私のところから自分は逃げない。自分の気持ちを自分から逃がしたらダメ。正直に自分のありのままの思いを主の前に語るんです。完全なる主への信頼なんです。

「こうしたら神様に怒られるかな?」「こうしたら神様、嫌うかな?」「こうしたら神様、顔が曇るかな?」と思う。そういうテストを受けているんじゃないからね。36:01.53

私もね、この年になって孫ができて、小さいな赤ちゃんの時から、だんだん大きくなっていくの見ると思うんです。赤ん坊は何にもできない。ただ、ほーっと居るだけじゃないですか。それをパパやママが全部見て、受け入れて、おむつ替えからミルクから着替えから、もう全部やるんですよ。なんにも赤ちゃんはしないけどね。全部親がやってくれているんでしょ。

5C⑭キングダムセミナー20260214

それから、ちょっとずつ動くようになって、ハイハイするようになる。立ち上がる。それでヴーワーって何か片言を喋り始めるでしょ。それを見ているとね、その行為、動きの中に、もうさすがですよ。完璧な親に対する信頼があるんです。子供や赤ちゃんの側からしたらね、絶対親は裏切らない。親は自分を痛い目に合わせない。もう完全なる信頼があるんです。この子、この信頼をどこで得たんだいと聞いてみたい。「あんた、いつそう思ったの？」って。

完全に信頼しているんですよ。その信頼の中にあるから、立ち上がって、平気で喋り、平気で何でも口の中に入れて、どこへでも行こうとする。それは完全に信頼があるからですよ。それに対して親が答えていくと、だんだんとね、親の気に入らないことをし始めるじゃん。ね、だから親は顔をしかめてダメでしょ。ダメ、ダメダメと言ってパッと連れて行こうとするでしょ。でも、そんなことの中にも子供からすれば信頼があるから、「親がダメって言ったらダメなんだ」というふうに思う。だから、赤ちゃんのあの育ち方というのは、ものすごいです。38:43.80

だけどね、我々人間もそうなんです。神の中に心と心を交えてゆったりと信頼できる。だから、ちょっと逃げて自分を横に置いて、自分を眺める必要なんてないんですよ。主の中に、もうさーっと心を落ち着けて、あの赤ちゃんのように信頼するんです。

なぜかという、神様も『我々の命』を、神が『似せて造った我々の心・思い』を信頼しておられるからです。だから、そこには、「どうかな？果たしてどうかな？」という懸念を何も思うことはないんです。39:45.93

そこに、蛇が持ってきたのは、「本当に神は言ったのか？」と、「(主なる)神」として向き合わないで、ちょっと横から神様を見るように、そして、(主なる神アドナイ エロヒームではなく)三人称の神(エロヒーム)という言葉で、「本当に、神はそう言ったのか」と言って、人と(主なる)神との関係に水をさすわけですよ。

で、その次に「神は知っているんだよ。」と。「食べたら神のようになるということを神は知っているんだよ。」「知ってるけど、神は言ってないんだよ。あんたたちに」と言うんです。・・・ここで、狡猾な蛇は「神は知っているんだよ」というのを一番先に言うわけです。日本語の訳された聖書では、「神は知っているんです」というのを後に書くでしょう。でも、原文は違うんです。そこの呼吸が、日本語の訳では受け取りにくいですよ。41:05.71

「神様は知っているんだよ」と言われたら、そしたらエヴァにとっては、神様と『わたしとあなた』という呼吸で、心を交えて生きられていたのに、そこに「神様ってね」と横から言われたら、神様との間に溝ができるわけです。「彼(それ)」になるわけ。「あ、あの人ね」ということになるんです。そうやって隙間ができていくんです。41:49.67

だけど、イエス様が、それを改めてもう一度、「元いた出会い」に戻してくれたんですよ。今我々があるのはそのゆえです。だから"元いたところ"って「どんなところか」ということを知らないとね。昔、『私とそれ』の偶像の中にいたからといって、それが、元いたところじゃないですよ。最も、いたといえはいたんだろうけどね。もっと以前、「本当にいたところ」を思い出した方がいい。そのようにできているわけ。42:48.23

私たちはいつの間にか、ツーンとして気取ってしまうけど、互いの中に飛び込んで生きることなんです。神様は私たちの中に飛び込んでこられているんです。聖霊が飛び込んでこられているんです。だから、異言で祈る、語って交わることの大切さも話してきましたけれど、それはもうリアルなことなんですよ。主の中に飛び込んでいかなきゃ、主の心はわかりません。我々のところに飛び込んできてくれた聖霊。その聖霊と一緒に書いたのが神の言葉、聖書です。だからイエス様は、聖霊は、私のことを分からせ思い出させてくれるんです。

「聖書に書いてある主の言葉を悟らせ、それを思い起こさせてくれるんだよ」と言ってるわけ。だから、「主よ」と、いちいち言わなくても、もう内なる思いが自動的に、どこでもそう。いちいち祈りの姿勢を取らなくてもどこでもそう。

「信じなさい」という、この『信じるという生き方』を、我々が自分の体の中に治めて、その呼吸をしてないのに、人に「信じなさいよ」と、「信じたらいいよ」と言うか?!という問題なんです。それは、伝導でもなんでもない。伝導は、宣教というのは、神と心と心を合わせて呼吸し合って飛び込み合っているあなたの心の呼吸の中にあり、あなたのまさに体の中にある。その生きてるあなたの中から神様がイエス・キリストが現れてくださるんです。それが宣教であり、伝道なんです。45:43.44

だからあなたが、その中で誰にあっても、どんな人と対話しても、どこに暮らしても、安心して。そこに神の国が現れるということです。46:09.50

最後に『福音を』っていう言葉《ユー・アングリオ》、グッドニュースなんです。もの凄いとびっきりのニュースなんです。この神の国が、神と人と、人と人との素晴らしい関係性がよみがえったぞ。よみがえったところか、原初の始めよりも、もっと濃くなり、完成していくんだぞ。」と、そういうグッドニュースなんだよということなんです。47:01.74

はい。どうですか？これをもう一度我々の中にしっかり治めていきたいんですけど、・・・この現在、今を、私たちは『神の国を満喫するのだ』ということなんですけれど、だけど、聖書の中にはもう一点、『神の国がこれから来るぞ』と受け取れる表現もあるんだよね。確かに。遠い彼方の『神の国』というものも確かに書かれてるんだよね。それをキリストが『再来』するという言い方、キリストが『来る』という言い方で。・・・もうクリスチャンならみんな聞いたことがありますよね。『再臨』についてとか。ちょっとそのところを今日は触れたいなと思った次第なんです。そのところを、補佐・補足する意味で。今、私たちはこの『神の国』のその中でいて、『神の国の中に生きているんだよ』ということについて。よろしいですか？ここまで、ついてきてくれますか？48:56.04

さて、そこでですね、今日話したいことは、今話したことをしっかり消化して踏まえた上で、聞いていただきたいんですけど、・・・この前配ったこのプリントの中に一つこういう言葉が出てきています。49:23.40

[そして近づいた]というところがあるんですけど、『**近づく**』は啓示文書(聖書)では、「もうすぐ来るが、まだ来ていない」ではなく、「すでに来ている」「あなたの前に来ている」こういう受け取り方をされていますよと書いてありますよね。だからここなんです。ちょっと、ここは頭を使って理解して欲しいんですけどね。

聖書というのはどんな本ですか？聖書というのは何が書いてあるんですか？なんか分厚くて難しそう。なんか六法全書みたいなね、カクカクこうあるべし、こうあったらこう罰せられるべしとかが書いてあるんですか？・・・それから、よく聞くんじゃないですか。聖書には『愛』が書いてあるというけれど、旧約聖書から読み始めた人は、「ねえ、これどこが愛なの？」と言われたことはありませんか？本当に読みにくいし、わからない。何が言いたいのか？あれこれ、あれこれと。いろんな文章や書物があるけれどというね、・・・ここからちょっと説明させてください。もうキングダムセミナーの5クール目ですけど、もう初めから何回も何回もこの説明してるんで、「ああ、またか」と、「もう、それわかったから次行って」と言わないでね。本当にとっても大切で、今日は今までになく、詳しく言いたいと思います。はい。大事なことからね。51:35.40

これには、『**啓示文書**』という意味をわかってもらわないと、この『**キリストの再臨**』というのも受け取れません。だから分かって下さいね。神様は、無限なお方ですから、私たちが神様のすべてを知れるわけがないじゃないですか。わからないじゃないですか。なぜならば、**我々は有限な存在だからです**。次元的に言うと3次元で生きてます。神様はもう4次元も5次元も6次元も、もう完全に無限でしょ。

その神様が、自分の心からの神の世界を現わそうとされて、神様の心に、まず神様ご自身も『我と汝』だけ、それだけじゃなくて、『我々に似たものとして』もう一人の『あなた』を造ろうとしたわけです。だから、世界が創造される前に神様の心の中にも『あなた』というのが満ちてるんです。だから、『あなた』という存在を我々に似せて、アダムを造ったんです。でしょ。そのアダムには、アダムの気持ちがあり、考えがある。神様＝アダムじゃないわけです。同じだったら、『我と汝』の交わりではないじゃないですか。神様の独り言になっちゃう。だから、アダムはアダムとして造る。それもね・・・今はちょっともう省くけど、ヘブライドの造る過程の中において、ちゃんとヒントがあるんです。53037.20

神様は、**[神の像に]**と訳してあるけど、半分違うんですよ。もう、このことを聞いたことがある人、いますよね。**[彼の像に彼を造った]**(創世記1章26節)というところがあるんです。それも訳し方によるけれど、アダムをアダムのように造った。そして、それを**[神の像に造った]**と重ねて書いてあるわけですよ。**[彼を彼のように造ったんだ]**という風に。それを訳す時に、この**[彼のように]**は、「神様に決まっているだろう。」と言う思いから、**[彼]**を**[神]**の像に造ったという訳にしているんだけど、**本当は[彼の像に]、[神の像に]とダブらせて書いてあるわけなんです。**だから、アダムにはアダムの固有な個性があって、しっかりしたアダムの世界がそこにある。それでいいんです。それで神様はアダムと相対するのです。そのアダムに、神様は自分のことを語り始めます。

5C⑭キングダムセミナー20260214

そして、神さまは、「全部のもの食べていいよ。なんでも食べて良いと言ったんです。」ところが、そ園の中央にあるという・・・ところを話していると、もうその話ばかりになっちゃうから、今日はやめておきますね。
55:42.42

その神様の世界、神様の思いを、どうやって人に伝えたらいいんですか？特にアダムとエヴァがエデンでしくじった後、それを回復するために神様が動くんですけど、どうやってその子孫に神の思いを教えたらいいんですか？アダムもアダムの子孫も長、くあの時代生きたから、いっぱい語ったと思いますよ。でも、もっとその後代々に、神様は、手を尽くしていっぱい語りかけたわけですよ。

その神様が語るというところが問題なんですけど、人間の心、頭に分かるようにどうやって神様が語るようにさらたかという、・・・ちょっとラインの皆さんにはわからないけど、喋りながらちょっとホワイトボード使って話しますね。もうこれ、何回も話してるので、何回も聞いた人は、言葉だけでわかると思います。57:31.44

人間の世界があって、神の世界がある。神様は無限です。無限のお方。無限の世界。一方、人間は有限です。これはわかりますよね。神様の世界にある無限の言葉や思い、神様の気持ち、これを人間の世界にどうやって伝え、分からせるかという、神様の思いを何に表したかという、ね、神様の思いを人間の世界の言葉を使って、ここで表現したわけ。言い表したわけ。ここに、**神様の一つの映像を映すわけですよ。そして、ここに神様の絵を描くわけ。**

神様が、神様の言葉で書いた絵、その言葉は人間の言葉を借りて、人間の言葉を駆使して、神様は一つの情景を描く。この情景を描いた、この描かれて出された神の映像を、人はこれを見るわけよ。そして、これを見ることによって、**人はこれを通して神の思いを悟るわけ。知るわけなんです。**このここに描かれたものが、聖書です。

神が描いたものを人間が見るわけ。耳で聞くわけ。最初はね、神様の語りかけを聞くわけ。神様の思いと語り、神様はこれを人間にくださったわけ。そして、人はそれを見て、耳で聞いて心にそれを治めて、神様の思いを知るわけ。**だからその意味で、この神の言葉というのは、神様の思い・語り、神様の心を現わしている絵なんです。シンボルなんです。**1:01:20.52

でも、こういう説明したらクリスチャンの中には怒る人もいる。「何言ってるの。そしたら、神様が描いた絵なんなんだったら、それは神話ですか？あなたは、聖書を神話だというのか？」と。「そうじゃないでしょう。事実、ありのままじゃないんですか？」と言って、つまづかれるんですよ。だから皆さん、この話を今ここで私が言ってるけど、あっちこちで誰かれとなく喋ったら、つまづくし人がいるからね。つまずいてた？笑ってますね。
1:02:22.05

だけど、付け足しておきますけど、いいですか？この絵に描かれたこの『絵』のための絵の具も筆も、そして、何を隠そう神様が選んだピッチであり、絵の具であり色であり、神が選んだ一言一言だからね。真実なんです。真実なんです。そういうことですよ。**だから、私たちが神様の思いを知ろうと思ったら、神様が実際、一番最初にどんな言葉を使ったかということまでたどらないとね。**このいろんなフィルターにかかった映像、絵だったら困るじゃないですか。だから、最初のヘブライ語、最初のギリシャ語をたどって、この絵がどんな絵かという

5C⑭キングダムセミナー20260214

のをしっかりと見極めることが必要なんです。その時に本当に字義的にこの絵を見ないとダメなんです。「字義的に聖書を読め」と言うじゃないですか。その字義的というのは、初めに語られた言葉に、一つ一つたどりながらどんな絵を神様が書かれたかということ、しっかりと誤りなく見ようとするのでないといけないんです。だからね、その時に「ああ、作り話か？神話か？」という話はもう論外です。天地創造のあの姿を科学的に確認しようがありませんよ。1:04:47.34

でも神様は一語一語、それを語って、語りかけたということの中に神様の思いが、気持ちが、何をこれで悟ってほしいかということが現れているわけ。それを人がこれを見て読んで、「ああそういうことか」と、その絵を見て、自分の心の中に、悟りが開いてくるんです。

もっと聖書的な言葉で言えば、これって、自分の心の中に覆いがかかっているわけ。覆いをかけてるわけよ。ベールをかけてるわけよ。で、それは我々が見る時に。開けてくる。啓示になってくる。「ああ、そうだったのか」と。だから同じ天地創造の物語を聞いても、エデンの園の話を聞いても、そこで見る人によって、どこまで覆いが取り除かれて明らかになったかというのは、みんな違います。みんな違うんです。

(ホワイトボードを指して、)

これを見上げて、神の世界が、分かってくるんです。そしたら神の世界というのは霊でしょ。霊がこの絵を通して、我々のところにやってくる。そういう一つのパイプであり、文字通り神が描いた絵なんです。それを我々が聖書を読むたびにそれを読むわけです。だけど、聖書って、一人が書いたのではなくて、もういっぱい多くの人が、長い時間、時代をかけて、神様が一人一人と出会って、神様がその人に思いを与えたわけですよ。

パウロのように、神と出会った人は、与えられた思いを持って、語ったんです。そして、絵に描いたんです。文字に書いたんですよ。それがずっと凝縮されていって、たくさんの人に同じ神様の心がそこに現れている、そういう文章になったんですよ。1:07:31.32

だから、これは啓示文書なんです。黙示文書なんです。『黙示』というのは、隠してあるってこと。隠してあるけど示したいという。そうでしょ。あなたがそれを見て、「悟れるなら悟りなさい」と。「聞く耳のある人は聞きなさい」と。こういうものなんです。

だから、イエス様は、いっぱい例え話で言いました。「聞く耳のあるものは聞きなさい」と。この例え話で悟りなさいと言った。それは例え話という絵を描いて、それを聞いた人が見た人が、「なるほどな」と分かるために。

だから、我々も・・・例えばあなたは聖書を読み始めて何年、神に向き合うようになりましたか？それは10年20年30年かもしれません。もっと聖書を読んできたかもしれない。けど、どこまで、その覆いがかぶさったものを自分の中で剥ぎ取れたか。それは、その人、それぞれです。1:09:02.93

通りいっぺんに箇条書きにして「こうですよ。これこれ信じます。これ賛成しなさい」って、使徒信条みたい

5C⑭キングダムセミナー20260214

に、・・・確かに書いてあるけどね、でもその書いてあるものを本当に自分の中に打ち開かれて、「その中に私は住んでいます」と。「それが私の部屋です」と。言えるようになるかどうか。

だからね、神様は私たちに本当に引っ越しを薦めるのが好きなんですよ。いつも同じ部屋で、いつも同じ壁紙で、いつも同じ家具の中で、我々は住んでいる。でもね、あなたに新しい住まいをあげるよ。あなたの部屋はもっと変わったものになるよ。これを黙示文書・啓示文書、そして黙示言語・啓示言語と言います。1:11:10.92

だから、聖書の中には、もろに描かれたというタイプのものもあるし、けど、かなり歴史的な事実としては、ガッチリそれを描写しているのもあるんです。全部が全部、本当にこれ、どうかな？というものではない。けれどもですよ、そこには、例えばマタイによる福音書なら、マタイが見たことを書いたんでしょ。マルコもルカもヨハネも。でもなんで4つもあるんですか？イエス様の生涯。それって、マタイがマタイのうちに現れたイエス様の姿があって、マタイはそれを書かざるを得なくて書いたし、ルカもマルコもヨハネも、それぞれが表しているんですよ。でも、それぞれがちょっとずつ違う。こっちがあるけど、こっちにはこれはない。でも、それぞれの描いたものの絵を見て、そこでマタイに教えられることと、マタイを通して神が語っていることを得ることと、ヨハネを通してヨハネから得ることとは違うんです。深みが。それぞれポイントが違うんです。1:13:02.30

で、それが私たちの内に濃厚にきて、その濃厚さがさっき言ったように、あなたという内側に、主と相互内在があると、あなたの内側から溢れ出る。あなたの生活、あなたの生き様。あなたの存在。そういうものが、また他の人にシンボルになるんです。また、他の人の絵になるんです。

だからあなたの言った言葉一つ一つというよりも、あなたの存在の中から、あなたの主との呼吸の中から、その中から、神様の啓示が、神の言葉が、神の呼吸が溢れてくるんです。解き放たれていくんです。1:14:18.99

アブラムは、『いいお父さんです』という意味です。ところがアブラムじゃなくて、「アブラハムにせよ」というのは『多くの人のあなたはお父さんです』と、言う意味になります。つまり、今度は周りに向かって、あなたが印となるんですよ。ということですよ。あなたによって多くの人は祝福をされるからと言って。

サラもそうですよ。初めサライと言われてた。サライというのは、その気高い婦人、王女みみたいなもの凄い貴婦人という意味で、最後に「イ」をつけたらね、『私の』という意味になるんです。だからサライと言ったら『私の貴婦人さんよ』という意味になるんですが、神様は「もうあなたはサライとは呼ばない。サラだ」と言われた。それには、貴婦人だけではなくて、もう一つ重複する意味がある。『サラー』というのはね、『解放する・解き放つ』という重複した意味があるんです。だから私はアブラハムの夫人としてサラをもう『私の』と言うんじゃないんだ。『周りの人のためにあなたの気高さを解き放ちます』という、そういう思いが込められているんです。

でも、啓示文書・黙示文書というのは、それだけと思わないで。今言ったのは、単に知識的な理解的なものでしょ。この啓示文書・黙示文書というのは、我々の中に飛び込んできて、そして我々の中からまた解き放たれていく、そういう動的なものなんです。そう受け止めないとね。エネルギーッシュなダイナミックなものなんです。そこを受け取らないと、この説明をしたって知識的に「あそうなんだ」って終わってしまいますからね。

はい、休憩を入れたいと思います。3時ちょうどに後半を始めましょう。ちょっと10分間休憩いたします。

後半

では、後半を始めます。今休憩の時間に、こちらでは濃厚な話が交わされたんですけど、どうでしょう。ちょっとそのことをラインの皆さんにも分かち合いたいと思います。よろしいですか？ はい。

この絵として書かれたシンボルである聖書の言葉というのは、理解したけれど、本当にそれだけしかないのか？という質問があったんですけど、これって神様から特別に、神様の民として、もちろん全世界の人を神様は神の民としたいんだけど、一度にあつという間にそれができるわけではなくて、特別な神に向き合っている人、また神様が選んでいるそういう一握りの人と言いましょか、そういう人たちに向かったもので、それを特別啓示と言っています。

でも、そんな聖書なんかを知らない、読んだことがない、聞いたこともないという人がたくさんいる。その人には神様は何も届けないのかというと、この本を持って行って、いちいち渡さないでダメなのかというと、そういうことじゃなくて、神様は一般啓示として、この天地万物を見て、これを見るだけで、『神を知る』という、そういう啓示を与えておられます。それを一般啓示と言います。ですから、いわゆる特別啓示と言われるものと一般啓示というものがあるということ、それもちょっと心にとどめておいてください。何かここ迄で、質問ありますか？大丈夫ですか？03:19.19

さてさて、そうしたら、この神様の使われた黙示言語・黙示文書というものを実際に開いてみましょう。で、特に今日は、『神の国がすでに来た』というところを、私たちは読んできました。

ところが『神の国はこれから来るんだ』というところもある。そう思って、キリストがもう一度来る『再臨』があるということ、これを耳にしてきた方が多いと思います。で、そこをちょっと開いてみましょう。

『キリストの再臨がある』あるいは『世界の終わり』とか、『終末』とかと言われるところって、何処？と皆さんに聞かれたら、どこを思いつきますか？まず、「それってやっぱりあそこでしょう。」というところがありますよね。

マタイによる福音書の24章。有名すぎますよね。ここにも、いろいろ書かれています。そして、これに付随したような例え話がいっぱいあるんですよ。さあ、そういうところを見てみましょう。

例えば、・・・まあ、24章の1節からね。【イエスが宮を出て行かれる時弟子たちが近寄ってきて、イエスが宮の建物を差し示した】2節【そこでイエスは彼らに答えて言われた。『このすべてのものに目を見張っているのでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません』】・・・何か大変なことが起こりそうだと・・・3節【イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った】・・・当時、このことを道で、大声で尋ねるわけにいかないんです。だって神殿の建物が、石が崩されずに積まれたまま残ることは決してない。こんなことを人に聞かれたらもう大変なことでしょう。石ぶつけられるから。だから、ちょっと、ちょっとイエス様。こっち来てくださいよ。密かに身元に来て

5C⑭キングダムセミナー20260214

言ったんです。・・・「**お話ください。いつそのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。**」と、ここから始まっていくんです。

だけど、ここで早速ですよ。「**お話しください。いつそのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには・・・**」という、この『**来られる**』という言葉。それと、『**世の終わり**』という言葉も、この言葉スラッと訳されて書かれています、**もうこのこと自体が、いわゆる黙示言語**になっています。そういうのがいっぱいあるんです。それで、そういう黙示言語というのを、ほとんどというか、かなり取り上げて、しっかり紹介しようかなと思っていたんですけど、そんなの 1時間 2時間 3時間で終わる問題じゃないから、そこまで、できないんですけどね。

ここで皆さん、キングダムセミナーの本、ありますか？キングダムセミナーの本の 80 ページ。いや、ちょっと長いので、83 ページ見てください。**83 ページの下の段**にこのように書いてあります。10:51.36

【**神の国の啓示は、まさに再臨の教えに関係します**】と。

このように御国の例え話を黙想して、より一層明らかになるのは、**私たちの心に染み込んでいる『キリストの再臨についての概念』**でした。おおよそ次のようなものではなかったでしょうか。

・・・と言って、ここに縦に、ずらーっと順番に書いてあるこれが、全部皆さんが受けてきたというんじゃないと思いますが、多かれ少なかれ、その所々、一部分でもこういう言葉をもうすでに聞いてこられたと思います。

次に、**84 ページ上から**

こういった構図で再臨を受け取っている方が多いと思います。ただし、『携拳』の時期については、「患難時代前期」「中期」「後期」3つの考え方に分かれています。これは 20 世紀初めに・・・云々とまあ、ここは後で読んでください。

その次、**上から 3 段目**のところ。

しかしながら、現代では、生ける神のみことばを各々一時代に限定し、押し込めることが、わかりやすいとはいえ、神の言葉を浅薄なものにしている感が拭えず、疑問の声が大きくなってきているのです。

・・・あのね、こういう上の縦列に書いてあるような再臨感というものが、勿論、語られてきて受け止められているのも事実です。**だから私がそれについてどうのこうのと言いたいんじゃないんですよ。**ね、だから深くそう思っていたのに、何？否定するの？と思わないでくださいね。そう思って聖書を読んで、そう思ったかったらそれでいいんです。だけど、さっき私が前半に言っていますように、**黙示言語・黙示文学としての聖書のあり方をしっかり謙虚に受け止めるならば、この縦列のように書いてあるそこからこう読み取ったという理解は理解で、その人がそう受けたんですから、それでいいんですけど、でも、「それだけの 1本の幅じゃないですよ」ということを知っておいてほしいんです。**14:10:10.92

黙示言語・黙示文学というのは、**神様の言葉を一つの物語として描いていきますから、その言葉の意味には幅があるんです。**訳された言葉をそのまま受け取って、いわゆる理科的にこの順番でこうなって、ああなって、こ

5C⑭キングダムセミナー20260214

の年代でこうなって、ああなってと言って、一刀両断にしてしまえるものではないんです。縦列のこのようにそう受け取ってもいいんだけど、受け取るにしても、もっと基本的な黙示文書というもの幅を自分の中に治めていないと、ちょっとこの順序列が違ったら、そうしたら、それだけでつまずいちゃうでしょ。ショックを受けちゃうでしょ。だから、この後半で紹介したいのは、そこなんです。その幅をきっちり理科的に全部解釈して、科学的に計算的に全部やって、チャンチャンと、終わるものではありません。15:59.76

次、85 ページ。

【再臨に使われている 5 つの言葉】と書いてあります。5 つだけじゃないんですよ。もっとあるんだけど、特に主だったものをして、・・・ここでちょっと読むよ。16:21.78

まずお知らせしなければならないのは、再臨について使われている原点の単語の種類です。ジョン・ロバート・スティーブンスさんは、その著書『キリストの再臨』において、このギリシャ語の分析から始めています。・・・はい、このジョン・ロバート・スティーブンスさんの『キリストの再臨』というのを英語から翻訳して、またゲラ刷りというか、肉筆の原稿を書いたのが今私の横にいるこの方です。(奈良原先生) そうなんですよ。それは、要約版で・・・それをいち早く私は読ませてもらってね。そして、「そうか!」ということで、早速私もギリシャ語の聖書に噛みついて同じように、もうそのことを調べまくったという経緯がありまして、・・・その啓示とこのスティーブンスさんの調べた内容に、私が調べた内容を加えて、本当に小さく短く凝縮して、ここに紹介しているという次第です。

その下の段。

新約聖書の中には、キリストが再来することの書かれている 32 の聖句がありますが、日本語聖書では、この 32 箇所と同じ単語ではなく、いくつかの言葉が使われています。『再臨』『来臨』『到来』『来る』『現れる』『輝き』などです。日本語で読んでいる限りにおいて、これだけの言葉が 32 回のうちに使われていても、聖句を読んだ時には、すべて同じ『一瞬のうちにイエス・キリストが再び来る』という意味内容で受け取ってしまう。受け取ってしまいがちです。18:56.52

また、日本語の不思議さと言いましようか、これら幾種類もの言葉は、キリストが再来を飾る聖書の豊かな文学的表現力ということになってしまうのです。・・・同じ言葉ばかり使っているとね、単調でつまらないから、いろんな言い方、角度から言っているんだなって。聖書文学という感じになってくる。19:29.66

しかしながら、このように『キリストの再来』という出来事が決まった言葉ではなく、幾種類もの日本語で訳されているということは、当然原典のギリシャ語においても違っていることを意味しています。19:56.16

原典では、この 32 箇所に次の 5 つの単語が使われています。はい、ちょっと知っておいてくださいね。またギリシャ語が出てきますけど。

5C⑭キングダムセミナー20260214

[1] 《パルーシア》『臨在』

これは、『来る』とか『臨在』とか『到来』とかと訳されているんだけど、32回のうち最も多い17回がパルーシアです。これは厳密な意味では『臨在』『存在』『いること』『出席』などです。元来《パルーシア》は、皇帝、王、総督などが町や州への『到着』と『滞在』を表す言葉でした。王の訪問に対して町は準備万端を整えることが要求されました。王に冠を捧げるため、税金が課せられ、『王の滞在』のための穀物が集められたのです。注目すべきことは、パルーシアの焦点が王の『到着の『一瞬』ではなく、王の滞在の『期間』であったということです。何よりも準備と装備、王の隣席への気遣いのすべてを王の滞在の期間、維持することを要求されたからです。そして、もちろん王は人形のようにじっとしているわけではなく、その滞在の期間に古い制度が廃止されたり、新しいことが決められたりして、王は精力的に統治を行います。要するに新しい価値と様々な変化が次々に生まれる期間でもあったわけです。それらは王が隣席する以前では、なかなか変えようにも変えることができなかったことでした。人民の積もり積もった望みと要求が、王の御心によって、一つ一つ実現する期間でした。また、王の目に、町の隅々がすべて明らかにされてしまう期間でもありました。したがって、《パルーシア》は王の到着の一瞬ではなく、王の在位・臨席の一期間を指しています。22:18.24

単語としては、《パラ》『傍らに』と《ウーシア》『居ること』の合成語で、『そばにいる』という意味で、正確な訳は『臨在』です。聖書が『イエス・キリストのパルーシア』を語る時、それは『イエス・キリストが私たちと共に在る、居る、来ている』ことを意味しているのです。パルーシアの理解は、『再臨』を理解する上で最も重要な単語となります。

日本語聖書で『到来』『来臨』『再び来る』などと訳されているところが《パルーシア》です。これまで一瞬のうちにやってくるキリストをイメージして読んでいた数々の御言葉を本来のパルーシアの意味で黙想すると、そこに何が見えてくるのでしょうか。23:35.52

・・・何が見えてくると思いますか？皆さん。我々のところに『イエス様に来る』と言ったって、もう主と向き合って、相互内在の真理を受け、その現実を受けた時、もう来てるじゃん。もう来てるやんか。ということになるわけ。ね、それなのにまた到来するというのは、どういうこと？主と臨在の中に我々いるじゃないですか？

だけど、みんながみんな一瞬のうちにあっという間に、主の臨在の中に入れるわけじゃない、入ったわけじゃないよね。入っている人もいるけど、今入りかけてる人もいる。ちょっと触れた人もいる。でも全然そこにはいない人もいる。そういう歴史の大きな川がダーッと流れている。我々も主の臨在の中にいるということは、実感するけど、じゃあ、神様の存在、在ると言われる神様のすべてなの？今現在すべて持ってるの？と言われたら、いやいや、そんなことはない。まだまだ神様の存在がもっと濃厚になっていく。もっとリアルになっていくはずでしょ。それは、一瞬のうちにというイメージじゃなくて、一つの期間。25:55.34

じゃあ、初めペンテコストの日に聖霊が下って、あの時主の臨在があり、その時からじゃないですか？イエス様が『私は夜終わりまでいつもあなた方と共にいます』と言ってんのは。ずっと一緒にいたんじゃないんですか？ね、だからパルーシアってその点で長く見れば、もうあの時からずっとパルーシア。26:23.82

5C⑭キングダムセミナー20260214

でもそのパルーシアの濃厚さが、もっともっと濃厚になり、もっともっとキリストの体が築き上げられていくわけよ。そういう神が築き上げていくというその『歩み』の歴史。我々もその中にいて、我々も、最っとこれから濃厚な臨在の中に入っていくんだぞと。**それがね、動的に生き生きと書かれているんです。この啓示文書というの。それがパルーシア。27:18.84**

参加者: 啓示文書に書かれているとは、どこにですか？

先生: 聖書にです。

参加者: ヘブライ語で書いてある聖書にですか？

先生: ヘブライ語の啓示文章として聖書があり、ギリシャ語の啓示文書として聖書があるわけです。新約聖書もね。もともとの言語でオリジナルなそれが語りかけだったから。それを各国の言葉に訳したわけです。だからみんな読めるんだけど、だけど、字義通りにたどっていかうと思ったら、もともと神様が語ったヘブライ語を見ていくしかないというところがあるわけなんです。だから、オリジナルというか、元々の神様の書かれた『絵』って、「どんな絵なの？」と、しっかり見たい人は、ヘブライ語の前にいくしかないんです。

参加者: ヘブライ語をやるとしっかりと見れるんですか？

先生: 一つの手段です。けど、ヘブライ語なんか知らなくても神と『我と汝』の交わりの中で、はっきりと表されますよ。そうですよ。けど、神様のその絵をはっきりわかる一つのツテとして、開かれています。

参加者: ヘブライ語をやるとということは、分かる知識の中で、それを理解していくということ？

先生: うん、そこにヒントがあるわけ。だから、気づきがいっぱい湧き上がってくるわけ。原文を読んでいると、「そうだったんだ」というね、それが益になっていくんです。29:25.10

でも、ヘブライ語を全然知らない人はどうかというと・・・もう殆どがみんなそうじゃないですか。だってヘブライ語を勉強して読んでいても、わかんない人はわかんないんです。はい。ヘブライ語を学んだことがないし、知らないけど、直接主からそれを受け取って、理解できるという人もいますよね。そうですよ。そういう人もいますよ。直接得る人がいます。「ヘブライ語を読めるし、勉強した」と言っても、じゃあ、全部この絵を見たからと言って、ストーンと理解できているかということ、そんなことはないんですよ。残念ながら。でしょ。30:23.76

それがわかるのは、ちょっとずつその絵を見ながら主と向き合って、そこから通じる啓示、聖霊によるんです。だから翻訳だけ読んで主と交わって、日本語訳聖書を読んで、主と交わっていくことによって、それも同じものが得られます。それは聖霊の技です。「でも私ちょっと暇があるわ。ちょっと学んでみようかな」と言って、その書店に行って、ヘブライ語聖書を買ってあげればいい。まあ、そんな簡単なもんじゃないんですけどね。

【2】番目《ファネロー》『現れ』

新約聖書中のファネローは 50 回使われていますが、そのうち 4 回が再臨に使われていて、意味は「現れる」です。復活後の弟子たちに対する『**密かな現れ**』や『**特定の場や個人的な関係での現れ**』に使われます。

・・・これは結構、『現れ』『現れる』『弟子たちの前に現れ』とか、使われています。**公然としたキリストの現れ**というのとはちょっと違うんです。でも、**個人、個人にキリストは現れなさるんだということ**です。それが個人個人に対するあなたへの啓示。パウロの前にキリストはファネローをしたんです。こういうことがあるんです。

5C⑭キングダムセミナー20260214

公然とした物質的な現れというのではない、必ずそういうもんじゃなくて、多くは密かなその人たちへの現れになる。32:51.60

[3]番目《エピファメイヤー》

これも『現れ』新約聖書 16 回に使われ、そのうち 5 回が再臨に関して使われています。世に対する公然とした『現れ』『出現』を意味しています。

・・・これは密かにどうのこうのと言うのではなく、誰の目にもわかるように現れる。誰の目にもはっきりと理解できる、見てしまうほどの覆いが取られるという意味です。これ面白いことに不法の人の『現れ』というのにも、この『現れ』なんです。不法の人が本当に現れるかのようにキリストも現れる。だいぶ極地ですよ。

[4]番目、《アポカリュプシス》

『啓示』新約聖書中 18 回使われ、5 回が再臨に使われています。訳はこれも『現れ』と言われていますが、原語そのものの意味は、『覆いを取り除き、現すこと』で、『現れ』ですよ。神の奥義を啓示し、真理を露呈させることです。

・・・この《アポカリュプシス》という『啓示』だから、啓示文書と言われる聖書は、アポカリュプレオーとか言われていたわけ。元々は、聖書というそんな言葉はなくて、啓示書・啓示文と言われていて、そういう呼び方をされていたわけなんです。ですから、まさに啓示文書なんです。その『啓示』というのは、誰が見ても、ちょん、ちょん、ちょんと理科的にわかるもんで、決してない。本来は、読んでその物語や言い表し方の中のニュアンスを、よく自分の中に収めて、神と向かい合い、そして聖霊の助けで自分の理解となっていくものなんです。けれど、ここね、目を覚ましていないと啓示文書が、なんか理科的なもの、数学的なものだという近現代的な一つの文章、数字を計算して云々という、そういうものに段々と薄まっていくんです。35:24.00

だから啓示文書というのは、無限の神様からの私たちのラブレター。いわゆる語りかけなんです。神様が「ほら、勉強しろ」と言って、その教科書を渡したんじゃないんですよ。あなたへの語りかけを我々はじっくり自分の耳に収めて、心に収めていくということが大切なことだから。理科的に読むということは、神様の語りかけを『我とそれ』にしちゃうんです。それって。単なる研究の対象、解説の対象にしてるんです。36:49.08

啓示されていくものを、一枚一枚、ペールを脱ぎ取って、それで「あ、あなたはこう言いたいんですね」と。そうじゃないですか？めっちゃ、卑近な嫌な例になっちゃうけど、人が結婚する時、相手がどこに勤めていて、どういう給料でどういうボーナスで、どういう家を持っていて、どういう財産があって・・・と、計算できるじゃないですか、ね。相手がどんな人で、優しそうかな？料理ができるのかな？と、色々考えて計算して、ジャッジできるじゃん。そうでしょ。それで結婚するんだけど、と言っても、それでする人はそれでするんだけどね。それは、相手からの本当に外側だけの所謂一情報でしかない。『我とそれ』よ。そうじゃないですか？『我とそれ』だけど、本当に『我と汝』として、『相手と向き合う』というのは、そんな給料はいくらでどうのこうのというそんなことは、見ないでしょう。だから聖書も、全く神様から私にいただいた啓示文書を理科的に読もうとしてガチガチになったら、それは、開けていきません。そこを言っているわけです。38:41.74

5C⑭キングダムセミナー20260214

[5]番目《エルコマイ》『来る』

これは、本当に現実にその人物が移動してこっちにやって『来る』ということの意味しています。

88 ページ 2 段目

さて、これら 5つの言葉が『キリストの再臨』に使われているのですが、一つ一つのギリシャ語の単語に込められている意味と用例を知れば、これまで理解してきた『再臨』の構図に合わないことがはっきりしてきます。

明確な違いは、『再臨』に関するすべての言葉を『携挙』という瞬間に押し込めてきたことでした。今日は、具体的な聖書の箇所を上げる時間はありませんが、みことばの一つ一つを黙想しながら進めていくなら、解き放たれている啓示に圧倒されるでしょう。39:40.32

その下をもう少し読ませてください。

【現在はパルーシアの時代なのです】

まだ使われている単語の説明しかしていませんが、簡単なラインだけは話せると思います。キリストが来られる『局地』としての『再臨』に先立って、《パルーシア》と呼ばれる『主の臨在』の濃厚な一定期間が存在しています。この《パルーシア》の期間が必要だったし、大切なんです。なぜならば、我々が世代から世代へ繋いでいてキリストの体として成熟していくという、神様がこの『時』をどれだけ大切にしておられるか。これまでの歴史では起こり得なかった様々な主のみ業が起こされ、御国の奥義と真理の啓示の覆いがますます取り除かれていくことでしょう。40:47.44

また、主は公然とした現れに先立って、準備のできた人々に密かに現れ始め、『キリストの現れ』は信者たちの聖めを加速度的に成し遂げていきます。キリストの復活後の『現れ』は、弟子たちに対して密かなものでした。最初にキリストが来られた時のように、《パルーシア》の時期に、キリストは密かに現れ始めています。

このようにして、『キリストのからだ』は比類なき啓示、知識、知恵に進み、キリストの身丈へと整えられていくのです。患難の中を通ったとしても、どのような苦難も神の民を押し潰すことにはならないでしょう。どのような患難も通り抜けてしまうほどの恵みを持つに至るからです。41:40.10

《パルーシア》が進むうちに、『キリストのからだ』と『この世の民』との霊的レベルの差は愕然としたものになるでしょう。同じ町に住み、同じ道を歩いていても、その歩みは天と地ほどのものとなっていきます。

私たちはかつて、神が私たちに受け取るように用意してくれた成長と完成の恵みを、何でもかんでも『キリストの再臨の一瞬』以降に投げ込んできてしまいました。私たちの手の中に置かれていたものも、すべて神に押しつけてきたのです。けれども、それは父の御心ではないことがわかります。むしろ、私たちがどれほどの神の子になり得るのか、身震いするほどの啓示の前に私たちは立たされていることを知るのです。42:33.90

5C⑭キングダムセミナー20260214

このように、神の望みは、私たちが『極地』としての『再臨』にのみ、目を止めていることではありません。《パルーシア》のこの時期に、私たちは果たす務めがあるのです。ここまで歴史を導き、回復を丁寧に進めてこられた神は、歴史の連続のテープを『はいこれまで』と無下にハサミでちょん切るようなやり方はなさりません。私たちは神とともに、なめらかに、回復のピッチを早めつつ、神の国の時代に突入しようとしています。43:15.23

現在は《パルーシアの時代》なのです。百年前、あるいは二百年前に、現在の私たちのような主の臨在は経験できなかったことでしょう。かつての時代を走ってきた生徒たちも、私たちを見つめています。私たちの突入は彼らの完成になるのです。御国は今私たちにかかっているのです。43:43.02

再臨について、一度に多くのことを話すことは不可能です。さらに詳しいところは今後も繰り返し、御言葉を聞きながら思い巡らすことにしましょう。あえて細かく聖句を取り上げてはいけませんが、考えていくと、いろいろなみことばが繋がってくると思うのです。今話したのは全くの基本的ラインに過ぎませんが、これらのみことばだけでも私たちが自由にし、今までの疲れの癒しになることでしょう。あなたの国への渴きを祝福します。44:22.62

それでは、さっき開いたマタイの 24 章の弟子たちの質問のところをちょっと見て、他も見て、補足して終わることにしますね。

24 章 3 節[密かにみもとに来て言った。「お話をください。いつそのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時・・・というこれが、《パルーシア》なんです。・・・あなたのパルーシアの時、いつそのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」]・・・その次の『世の終わり』というこの言い方もさっき紹介した 5 つのところにはないけれど、これもね、一つ、メモしている途中だったら、ちょっとメモしておいてください。

『終わり』という言い方、この『終わり』と、我々が聞くと、本当に終わりのチョンだと思いませんか？もう局地の一点、『終わり』と思っちゃうじゃないですか。終わり、終わりと言われたらね。でも違うんですよ。この終わりというのも《ステンレイヤス》と言うんですけど、この終わりというのは、『成し遂げる』ということ、『完成する』『出来上がる』ということ、そういう意味合いがあるんです。46:19.26

なにもかも出来上がって終わって、というその『終わり』が終わりじゃないんです。違うんですよ。出来上がっていきその『プロセス』を終わりと言っている。だから、これって、ものすごい、びっくりするところがあるんです。だから、「あなたの来られる《パルーシア・期間》やその完成《ステンレイヤス・出来上がるプロセス》の時は、どんな全兆があるんでしょう」と聞いているわけです。46:51.72

なんで弟子たちがこういう聞き方ができるのかというと、・・・《パルーシア》とか《終わりの時》というのが、我々の時代の『到来します』とか『終わります』という概念とは彼らは、違うんです。弟子たちは、それがわか

5C⑭キングダムセミナー20260214

っているです。なぜかという、もともと旧約聖書のその歴史観というか、終末論、これからの希望というのは、彼らは、そんなチョンと終わってしまうことを考えてないからです。

彼らはこれからメシアが来て国ができて、他の国を治めて、豊かになって、万々歳の世界が彼らのこれからの世界なのよ。だからいつ終わっちゃうんですかなんて聞かないんですよ。我々の概念のように。

だから、「あなたが王になって来られ、臨在しておられる時が来る。もう間もなく来るでしょう。あなたがそれを造って完成されるんだ。」と、そう言って、出来上がる時が来る「その前兆はどんなんですか」と聞いているんです。

わかりますか？そこでイエスは彼らに答えて言われたんです。『人に惑わされないように気をつけなさい』と。『ききんだの戦争だのそんなことはみんな産みの苦しみの初めなんです』と。・・・そんなのはあるに決まっているけど、それが『完成』じゃないんだよということを懇々と、ここで言っておられるんです。 48:48.24

14 節[この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます]というこの『終わり』というのも、もさっきの『終わり』と一緒にというところちょっと違うんです。この辺りが、みんな『終わり』『終わり』と言われると分かんないよね。だけど丁寧に思い巡っていくと、この『終わり』は本当に一つのゴールなんです。『完成の瞬間』という感じの『終わり』なんです。《テロス》という言葉からです。

初めの、[世の終わりには]というのは、それを築き上げていく、その完成させ造り上げていく『時』には、どんな前兆があるか？と聞いている。

『造り上げていく』というのは、一つのマラソンで言ったらと 42 キロ走っている。その『最中』よ。そして最後のゴールが来る。その時が『終わり』《テロス》なんです。そういうプロセスの違いがあるんです。 50:06.42

はい、それで、そんなこんなで 24 章のもうちょっと進もうと思います。詳しく一個一個読んでいったら面白いんだけど。だからそれをやりたかったら、本当にまた別な時間を設けられる必要があるんだけどね。 50:29.04

27 節を見てください。

[人の子の来るのは・・・]のこの[来る]というのが《パルーシア》だよ。

[人の子の《パルーシアする》のは、]です。

それから、その前の『人の子』という言葉、これも啓示言語、旧約聖書からたくさん使われてきた。それをイエス様が自分に当てはめて『人の子』『人の子』とを言ってきたんだけど、この『人の子』というのが、啓示言語の渋いところで、いっぱい旧約聖書に出てくるんだけど、この『人の子』というのが深く掘り下げられているところがあるんです。

5C⑭キングダムセミナー20260214

それがダニエル書というところですよ。幻がいっぱい書いてある、そのダニエル書の中で、『人の子』というのは、こう書いてあるんです。・・・皆さん開けるのは大変ですから私が読むね・・・ダニエルの幻はこう。

ダニエル書7章13節[私がまた、夜の幻を見ていると、見よ。人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた]14節[この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は、永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない]・・・これはメシアなる者が来て、その主権が与えられ、多くの者が彼のところに集まったと、そしてその国は神の国であって、その神の国は滅びることがないと言っているわけです。人の子は、その中心であり、切先(きっさき)なんだと言ってるわけです。52:32.46

で15節[私、ダニエルの心は、私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は、私を脅かした]・・・もう、わけわからなくてね。そうするとね、その解き明かしがやってきたって言ってるわけです。

その解き明かしは何かというと、26節。[しかし、さばきが行われ、主の主権が奪われて、・・・ここにね、いっぱい獣がやってきて、その神の国を滅ぼそうとするのよ。で、[しかし、裁きが行われ、彼の主権は奪われて]というのは、この獣の力が奪われて、[彼は永久に絶やされ、滅ぼされる]

27節[国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』と言っている。・・・つまり、人の子人の子ってね、アダムの子、・・・ここをもっと説明しする必要があるんだけど、・・・あのね、《ベンオムアダン ベンアダーム》と言って、『アダムの子』というのは普通なんですよ。54:13.80

ところがね、同じ『人の子』でもここは別な言葉が使われてるんです。それは『アダムの子』という言い方じゃなくて、もっと別な言葉で、『弱々しい人』の単語が使われているんです。つまり『弱い子供』という言い方をされてるんです。(ここ、アラム語なんだけどね。)

なんでそうなの？イエス様が弱い子供なの？弱々しい子供なの？そうですよ。人の姿をとって、神の子であることを捨てて、人の姿を取って弱々しく我々のところに来たんでしょ。そのイエスが、『イエスのからだ』として『キリストのからだ』ができてくる。それが神の国だと。その御国の聖徒たちのことなんですよ。

だから、『人の子』というのは、弱々しいけれど、神によって建てられ、育てられ、力を与えられた『聖徒たちの国』のことを『人の子』という。『集合人格』のことなんです。55:41.82

そうすると、どうですか？さっきのマタイの24章の27節の[人の子のパーシアするのは・・・]というところは、『キリストの集合人格』である『キリストの体』がしっかり『我と汝』の啓示によって結びついて豊かになって来るとのことなんです。56:14.28

5C⑭キングダムセミナー20260214

マタイ 24 章 27 節のその続き、[・・・いなづまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。]・・・そのようにパルーシアなんです。そしたらここを読んでどうですか？「稲妻がピカッと光るような一瞬じゃん」と思わないですか？そう見てしまいますよね。

で、この『稲妻』というのが黙示言語、黙示文学なんです。この『稲妻』というのは、あのピカッと光るあの一瞬というように、現代人はそう取ってしまいますが、ところが、啓示文書では光ってこの全地をしっかりと照らしてくれるそっちの方に重点があるわけなんです。57:18.12

だからルカの 17 章の 24 節なんかはね。明かりの輝きと訳してる。稲妻じゃない。明かりの輝き、つまりランプやろうそくを灯して、それに部屋が照らされていく。そのようにな期間がパルーシアだと読むことができます。あくまでも稲妻にこだわっていくなら、一瞬のことだと思いでしょ。だからあなたが、どっちを取るかなんです。

しかし、確かに言えることは、古代のこの『稲妻』というもののイメージと語られ方からすると、『一瞬という時』に強調はない。むしろ『ピカッと明らかにみんな照らされていく』という、そういうところにあるんだということです。58:39.59

それから、(マタイ 24 章)29 節 30 節もそう。これ黙示文学的な言い方に、どんどん進んでいくんです。29 節[だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。]・・・なんてこったと思うじゃないですか。

天の万象が揺れ動くというのはこれね、天地創造の創世紀の 1 章をね、丹念に読んだことがありますか？あの一日一日。大地を造り、そして天に星、太陽を造りというあの言い方が、何を言っているかということ。その黙示文学の受け取り方が必要になってくるんです。そうでないと、現代の理科的頭でこれ読んだらびっくりですよ。「え？太陽が消えるんだって!!」と、そうなっちゃいますよ。59:54.60

そして、30 節[その時、人の子の印が天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて、天の雲に乗ってくるのを見るのです。]というこの『天』という言葉も『雲』という言葉も啓示原語で、黙示言語です。理科的に全部描かれた通りに受け取ると、もう頭が破裂するほど、またそっちで考えないといけないということになってしまいます。

次とんで 35 節[この天地は滅び去ります。しかし、私のことばは決して滅びることがありません。]36 節[ただし、その日、その時がいつであるかは、誰も知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。]・・・この言葉、よく聞きますけど、父だけが知っているから、その日その時はいつなんですか？どうなんですか？と。聞いてもイエス様は答えなかったと。

37 節[人の子が来る(パルーシア)のは、ちょうどノアの日のようだからです。]38 節[洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり食べたり、めとったり、とついでりしていました。]39 節[そして洪水が来て、すべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。]・・・このところ、いいですか？

5C⑭キングダムセミナー20260214

[人の子が来るのもそのとおりです]と、結んである。

・・・これもパルーシアです。一瞬の時のことを言っていないよ。

で、**[ノアの日のようだからです]**と、このようにスラッと書いてあるけど、これ複数なんですよ。ノアの『日々』のようだと書いてあるんです。ノアの一日でノアの物語が終わるわけじゃないですよ。ここは、複数だから、**[ノアの日のようだから]**です。で、パルーシアの時なんです。そんなのがパルーシアですよとってるんです。

40節その時、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。**41節**ふたりの女が白を引いていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。]・・・これが、ノアのあの時なんだったらすよ、大地から取られてしまった方が、どうなんですか？いなくなった人たちじゃないですか。残ったのがノアたちでしょ。**だからこれを終末の時に、私たちは天に引き上げられるからと、それに当てはめることは無理です。そんなことを言うてるんじゃないんです。**

ノアの日々のようなこと（パルーシア・期間）が来るから、・・・**42節****[だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られる《エルコマイ》か、知らないからです。]**と。

・・・その『来られる』というのが、《エルコマイ》の方なんです。『実際にその時、パッとやってこられますよ』というパルーシア(来る)のゴールなんです。こういう風に、時を分けて動的に書いてあるんです。1:04:24.36

ねえ。「じゃあ、どうなんですか？」と言って、皆さん聞きたいことが山ほど出てくるでしょうけれども、・・・あの一、もうちょっと本当は言いたかったんだけども・・・もうちょっとだけね。1:04:45.24

マタイ 25 章を見てください。ここにね、興味深い例えがあります。イエス様が、これは黙示的に言ってるでしょ。**1節**天の御国はたとえで言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。**2節**そのうち 五人は愚かで、五人は賢かった。**3節**愚かな娘たちは、ともしびを持っていたが、油を用意しておかなかった。**4節**賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。**5節**花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。**6節**ところが夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声が出た。**7節**娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。**8節**ところが、愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』**9節**しかし、賢い娘たちは答えていった。『いいえ、あなた方に分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』**10節**そこで買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。**11節**そのあとで、ほかの娘たちが来て、『ご主人さま、ご主人さま。開けてください』と言った。**12節**しかし彼は答えて、確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。1:06:21.18

・・・これは、「ほら、最後の最後に来た時に、その時のために、えらいこと（大変な事）になるから。大変だぞ、お前ら」という、脅かしているたとえ話ですか？

このね、『目を覚ましている』というところ、そして、『私はあなたがたを知らない』って、さっき言いましたよね。最後に。この『知らない』という言葉がまたミソ。「お前らなんか知るか」と。「お前ら、天国に入れてや

5C⑭キングダムセミナー20260214

らん」と。「お前ら神の国にはもう絶対入るな」と言って、蹴り出したんだと。戸をパチンと閉めて、ロックをパチツとして、・・・そういうイメージを受けるでしょうこれ。1:07:15.25

でも、ここで『知らない』と言ってるのは、・・・また、『知らない』にもいくつか言葉があって、いい？この『知らない』という言葉は、そんな重く、重圧な『知らない』じゃないんです。1:08:01.08

重圧な知らないではなくて、『しっかり知っている』というのを《エピグノーシス》と言うんですけど、《エピ》それは、本当に『我と汝』、『あなたの前にいて、あなたを知る』という、そういう意味の『知っている』なんです。けど、ここでこの花婿が言っているのは、『あなたたち、いたんだ。わたし、あなたたちがそのように見えないし・・・』とそういう知らないであって、この10節の[戸が締められた]ということも、完全な断絶ではなくて、その区別に強調があるわけではないのです。

要するに、この『油』というのは、花婿と非常に向き合って、『我と汝』の深い交わりがあって、その気持ちがガーツとあるということを含めて言ってるわけ。

ですから、油を持ってる方も寝ちゃった。でも「花婿が来たぞ」という声に応じて、ムクツと起き上がって、「花婿について行こう」「向き合おう」という人たちの『向き合い』なんです。

ところが『油がなくなった』というのは、「ああ、もう眠くなつたし、自分たちはそこまでの思いはない」ということで寝ちゃったという感じ。

イエス様である主は、私たちのところに来ているんでしょ。来て心の戸をいつもノックしてくれているんでしょ。それに対して、婚礼の用意までできといて、「自分たちは、そこまで花婿の気持ちやその熱い気持ちを、持っているほどまででなかった」と。それで、『わたしは、あなたたちを知らない』と言っている。けど、そんなに、『お前たちとはもう断絶だ』と言う『知らない』とは程度が違うんです。1:10:08.93

それから、テサロニケ人への手紙の有名なところ。第一テサロニケ4章17節。[次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。・・・]この言葉もしっかりと啓示文書、言語なんです。

『雲』というのは『神の臨在』のこと。
神の中にいて、だけど、神はその中にいるけど、人間の目には、はっきり見えないよね。神は、だから「雲」という包まれるもので描いているんです。

で、その次、[空中で主と会うのです]と書いてある。理科学的な読み方では、「あ、空中に上がって行って、この空の中で合うんだ」と、いうことですよ。けど、啓示文学では、『空中』というのは、なんだかわかりますか？

エペソ 2 章の 2 節に他にも使われているんですけど、この空中の権威を持つ君(支配者)、諸々の天の空中の支配者たち。その意味の『空中』であるということは、啓示文学では、見え見え(明らか)なんです。

それを、理科的にこれを解釈しようとする、本当に天のあの空のところに行って、鳥が飛んでるかもしれないその空中になるわけです。1:12:33.84

エペソの 6-12にも『空中』、これが使われているんです。だから、我々のパルーシアの時に、何もパルーシアだからっていい言とばかりがあるわけじゃない。そこにはコントラスト的にいろんな悪や災い、そういうのがうじゃうじゃいるんです。サタン悪霊はその時が近いのを知って、彼らは必死で暴れ回ることでしょうよ。その最後の最後のパルーシアの煮詰まってきた時に、患難があるさ、苦悩がある。

我々、苦勞があるよ。でもその苦勞と災いの中で、我々は主と会うのです。それでも主と会うのです。そして、神のパルーシアの中で、栄光のキリストの体となっていくのです。

そして、それで上がっていっちゃうんじゃなくて、それで、この世のいろんなごたごたあることの中で、神と一緒に、我々は治めていくのです。そういうことなんです。そういうふうに啓示文書というのは、読む幅がいっぱいあるということを紹介しました。

これだけじゃないんですよ。まだまだいっぱいあって、もう本当に、わかるでしょ。私がプリントにできなかったというのが、どんなことかというのがね。だから、また掘り出して、皆さんと分かち合っていきたいと思います。

だから、神様は、私たちが『今どこにいるのか』というのを問うておられる。『あなたは、今どこにいるのか』と。『パルーシアの大事なその中にあるのか』と。『イエスのからだの相互内在として、あなたはあるのか』ということ。そこから、あなたは、周りを見る。それが『我と汝』なんですよ。1:14:48.52

そういう私をちょっと横に置いて眺めてみて、「ああ、まただらしがないよね」と言ってるのが私とあなたじゃないんですよ。神様に対しても。

そして、私を見て、神を見た時に、一日 24 時間、ひと月、31 日という時間が、『神の時』に、私たちに実現していくんです。それが《クロノス》から《カイロス》へという時間の変化なんです。我々の時間は《クロノス》でべったり、「ああ今日も終わったな。明日はこうで・・・」じゃないんです。

この日々は、『神の時』だということになるんです。パルーシアの相互内在の中で。

5C⑭キングダムセミナー20260214

そして、最後に、この時の概念は、《クロノス》と《カイロス》だけじゃないんです。啓示文学で、『時』というのは、もう一つあって、《アトモス》と言って、この《アトモス》から《アトム》という言葉ができるんですけど、《アトモス》というのは、原子の中の原子。もう、どう分けてもこれ以上分けられないという時なんです。

その《アトモス》というのが、本当にそれこそ短い時、『一瞬の時』、『あっという間』。我々が意識して迎える時を超えている時のことを言います。

《アトモス》という一瞬の光が放たれる。これが、さっき言った『稲妻の光』。その“一瞬さ”があるとすれば、その《アトモス》の光に我々が照らされて行く時に、我々は変えられるんです。一瞬で変えられるというそれは最後の最後のゴールの一瞬だけじゃないんです。

その《アトモス》は、私たちが主に向き合った時に、御霊の作用によって、御言葉によっても、我々のうちにもう“ピカッ”ピカッ”と、我々が一瞬のうちに照らされていく《アトモス》の一瞬の時なんです。それが、我々の悟りを生むんです。啓示を生むんです。気がつくんです。「あ、昨日までわからなかったけど、これか」という、それ。わかる？

「先月の私と違うぞ。これや」「去年の私と違うぞ。これや」という、そういう《アトモス》が、我々の中に増えていって、それに我々は『応答』していくわけ。応答できていくわけ。もうそこで、一瞬の《アトモス》の時で、光で、応答する能力がついてくる。だから。「あ、なら、これ」「それなら、これ」と言って、昨日の私と違っていくんです。先月の私と違っていくんですよ。そうやって我々は変えられていくんです。バルーシアの時に。

だから、この神の啓示文章を「私は持ってるぞ」と。「ここを受け取るぞ」とね。理科的な終末論でもって話したければいいですよ。それを話し、持ちながらも、でも啓示文書の原点として、この真理、これは変わりません。どういう終末論を持っている人に言っても、それは原点的に、御霊とともに開けて定着していきます。

はい、早口で申し訳ありません。また次回までにね、質問か、問いかけあれがあれば、どうぞしてください。

今日のところが分かっていたいただければ幸いです。主の前に、どうぞ向き合って、今日、聞いたことをじっくり煮詰めてください。あなたに益になりますように。主よ、感謝します。

はい、じゃあ時間がだいぶ過ぎました。これで終わりたいと思います。はい、ありがとうございました。